
空の手

朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の手

【コード】

N8958Y

【作者名】

朔

【あらすじ】

空知空が故郷に帰ってきて幼なじみと再開しました。

再開（前書き）

駄作ですが興味のある方は覗いてみて下さい。
この話はフィクションです。現実とは関係ありません。

再開

「帰ってきてしまった…」

僕、空知空 ソラチソラ は一年ぶりに戻った自分の家を見てつぶやいた。

普通は久しぶりの帰郷に心踊るはずが、表情は険しいものだった。

「おう、帰ってきたな。息子よお！」

「…ただいま。父さん」

家の敷地から声をかけてきた大柄で袈裟姿の男は、空知志雄 ソラチシオ といい空の実の父親にして、たった一人の家族。母親は五年前に他界してしまった。

「なんだ、空。お前また細くなつたか？」

「……ははは」

「まあ、話は後だ。早く家んなか入れ」

そう残し、志雄は家の中に姿を消えた。

「……………ハア」

僕は父さんがいないのを確認して一人ため息をつく。そして、この帰郷が大変なことになるのを僕はこのとき知る由も無かった。

「……………」

家の玄関に入った僕は驚愕で眼を見開いた。何故なら家の中が片付いていたからだ。

父さんは掃除が天才的なまでのダメっぷりでよく僕を困らせたが、空がない一年の間で掃除が出来るようになったらしい。父親の進化に涙が出そうになる。

「志雄さん。また散らかしてくれましたね？あと、何回言えばいいんですか！」

「違う！これは空が帰って来たから！！」

「また、訳の分からないことを！空は今いないでしょ！？」

父の変わり様に嬉しさと哀しさを感じた…はずだったのに。検討違いだったらしい。

「……………ハア」

知らず、またため息が零れる。少し高めのその声には聞き覚えがあった。

ドタドタと目の前の長い廊下を走りながら志雄と女性が現れた。しかし、何故か女性の手には盥。

「志雄さん。観念しなさい！」

「あ、危ないから！そんなもの投げないで！！」

「問答無用！！」

「危なっ！？」

女性が投げた盥を志雄は身体をひねり、躲す。当たるはずの目標を失った盥が回転しながら僕のほうに向かってくる。

「っ！？」

盥の向こうで女性が眼を見開き、驚いているのが見えた。

そりゃあ、気付かなかったにしても人に自分が投げた盥がぶつかりそうなら普通だな。（この場合、空が帰ってきたという驚きも少なからずある）

尚も回転しながら向かってくる盥を一瞥して、右手を前に出し、向かってくる盥を擦る。

《流川 ルセン》

飛来する盥とは逆方向に回転させ、力を打ち消す。それだけで、盥は回転を止め床に落ちる。僕は床に落ちる前に盥を掴み、盥を投げた女性に話し掛ける。

「久しぶり。縁。元気だった？」

「そ、空!?!」

一年ぶりの帰郷は思われない形で幼なじみとの再会を果たさせた。

「志雄さん。何で空がこっちに帰って来てるの!」

「何でって、縁ちゃん。空の家はここだし、戻って来のは普通じゃないか」

「そうですが……そうじゃなくて!」

久しぶりの父親プラス幼なじみとの夕飯は賑やかだった。縁は何故か僕が帰って来たのが気に喰わなかったのか、顔を赤く染めながら父さんに怒鳴り散らす。

少しいじけた雰囲気を出すと、縁は慌てて言葉を繋いだ。

「べ、別に空が帰って来たのが悪いわけじゃないんだよ?志雄さんが空が帰って来ることを教えなかったことに怒ってるの!空は悪くないから気にしないでいいから!」

「大丈夫。だから、そんなに焦らないで。舌嚙んじやうよ?」

「大丈夫!それにしても、志雄さん。どうして教えてくれなかったん…ッウプ」

「ほら、そんなに焦るから。らしくないよ」

苦笑しつつ案の定、舌を噛んで身悶えする縁に冷えた麦茶を渡す。相当、強く噛んだのか縁は麦茶をちみちみ飲みながら舌を冷やし始める。

しばらく話せそうにない縁に変わり、話しを戻す。

「何で、父さんは縁に帰って来ることを教えなかったの？」

コクコクと、喋ることの出来ない縁は首を縦に大きく何度も振る。

「何でってそりゃ。面白そうだったから……」

「父さん。いつも言ってますよね？人に迷惑を掛ける父さんは嫌いですよ？」

「ち、違う。俺は縁ちゃんを驚かせよう」と！

「それでもです。僕はそんな父さんは嫌いです」

「すみませんでした!!」

勢いよく頭を下げ、土下座をする志雄を見て、僕は何だか気不味い、縁は冷たい視線を送った。

青葉 縁 アオバユカリ は幼稚園からの幼なじみで、家同士の付き合いだ。だからこうして空知家の食卓で時々ご飯を食べに来る。腰の近くまであるだろう黒髪をポニーテールにしている外見は満点の美少女。

「空？どうかした？？」

縁は頬を染め聞いてきた。どうやら視線が気になった様だ。

「別にどうもしないよ」

軽く笑い掛け、縁から視線を離し父さんに戻すと少し残念そうな顔をした。念の為に言っておくが、縁には見られて悦を感じる特殊な性癖はない……はずだ。一年の間に変っていないけれども。

「……父さん」

「……はい」

声を掛けると、ビクツと土下座を継続している父さんの背が震え、そして今にも消えそうな声を出しながら恐る恐る顔を上げた。

この、クマのような大男（志雄）が見た目が細い少年（空）に土下座をしているという場面はなかなかシリアスなものだった。

「もういいですよ。楽にしてください」

「はい」

そして志雄は静かに夕飯をとり始めた。しかし、その背中が時折ビクビク震えていた。

それを見た縁は、満足そうに満面の笑みで夕飯に戻った。

夕飯が終わると縁は家に帰った。と言っても青葉家と空知家は徒歩5分で行く事ができる。

父さんから風呂に入るように言われ入り、自分の部屋へ。10畳の和室が僕に与えられた部屋だ。機能性重視のシンプルな間取りで部屋には、机、布団、本棚、本棚、本棚、本棚しかない。

僕は布団を敷いて、寝る準備をする。

時間は pm 11:30

僕は軽い欠伸と共に眠りに就いた。

再開（後書き）

不定期ですが更新していきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958y/>

空の手

2011年11月26日22時51分発行